

開発協力の 現場から

信頼が見える瞬間



吉田 憲 (JICA コスタリカ 所長)

コスタリカ、そして日本との歩み

中米の細長い地峡の一角に位置するコスタリカには、どこか時間の流れが穏やかに感じられる空気がある。太平洋と大西洋という二つの海に挟まれたこの小国には、軍隊を持たない国家としての静けさと、自らの選択で平和を守り続けてきた確固たる意思が同居している。

九州と四国を合わせたほどの国土に約 520 万人。決して大きな国ではない。しかし、1948 年の内戦後に「軍隊を放棄し、その分を教育と医療に充てる」と宣言し、それを現実の政策として実行してきたその歩みは、数字では測りきれない重みを持っている。クーデターや軍事政権、ハイパーインフレといったラテンアメリカ（中南米諸国）が経験してきた揺らぎを避けながら、民主主義と社会的安定を維持してきた。

日本との関係もまた、静かに、しかし着実に積み重ねられてきた。1935 年外交関係樹立。国際協力では、1960 年代の研修受入に始まり、1974 年以降は協力隊派遣、技術協力、円借款といった形で関係は深まってきた。現在では、かつて受け手であったコスタリカが、周辺国に対して知識や技術を伝える側に回る場面も見られる。目に見える成果だけでなく、人を通じた変化が蓄積されてきた結果である。民間企業への投融資事業や日本の中小企業の進出支援も新しいトレンドだ。

限られた資源の中で、それでも「信頼」をつなぐ

一方で、過去 30 年間にわたる ODA（政府開発援助）予算の縮減の影響もあり、他地域と比べて高中所得

国を中心とする中南米、とりわけコスタリカに対する協力の規模は極めて限定的である。数値だけを見れば、日本の関与は決して大きくない。

しかしながら、予算の多寡と国際協力の本質的価値は一致しない。JICA が掲げる「信頼で世界をつなぐ」という理念は、むしろこのような環境においてこそ試される。

たとえ大規模協力案件が難しい状況にあっても、人と人との関係を丁寧に紡ぎ続けること。目に見える成果が乏しくとも、その積み重ねがやがて大きな信頼へと結びつく。いわば「武士は食わねど高楊枝」だ。環境に左右されず、誠実に関係を築き続ける姿勢そのものが、在外拠点の役割だと考えている。

現場の葛藤 ーうまくいかない協力の現実

とはいえ、気持ちが悪くなることもなくはない。政府間で合意した重点分野に沿って、JICA が住民や先方機関と協議を経て、協力プログラムや個別案件を形成する。このことこそ JICA の在外拠点における主力業務であり、先方政府／機関、在外公館と相談し、また JICA 本部とも密に連絡を取り合いながら翌年度実施を見込む案件を形成する。その形成期間は 1 年を優に超え、「この案件であれば、なんとか実施に持ち込めそうだ」との感触も得ながら前に進めている。しかしながら、関係者の合意を得ていたはずにもかかわらず、時として、突然、「採択は難しい。採択不可」との無情な宣告がなされる時もある。予算という制約の前では、意義のある案件であっても実現に至らないことがある。

交渉、協議を行ってきた先方機関ではコスタリカ

人は、「なぜ、本部とも相談され、良い感触だった案件が突然、採択不可、となるのか」とは、面と向かって決して言わない。恐らく、国によっては面罵される場面、失望を隠さない場面だろうが、日本人同様、相手の面子を慮る国民性は日本と似ているかもしれない。しかし、その静かな受け止め方の中にある感情は、むしろより深く伝わってくる。

発展の中に残る「ギャップ」と向き合う

もう一つ、在外にいるからこそ強く意識するのが、発展の偏りである。

国の発展はもちろん喜ぶべきものである。しかし、往々にしてそうした発展の成果が、当該国や地域社会に等しく行き渡っているとは限らない。首都や成長分野では高度な制度や技術が整備される一方で、地方や周縁的な分野にはなお課題が残る。この「見えにくい格差」「説明しにくい格差」に対して、どのように関与するか。「発展しているんだから、国内に行き渡らせるのは当該国の責務だ」と単純に言えないからこそ国際協力は奥深い。これは単なる資源配分の問題ではなく、協力の在り方、先進国も含めた国の在り方、そのものに関わる問いである。

限られたリソースの中で、どこに光を当てるのか。正解はない。だからこそ、日々悩みながら、それでも一歩でも前に進むしかない。

それでも続ける理由－「信頼」が見える瞬間

そうした日々の中で、ふと報われる瞬間がある。国際協力に携わって良かったと心底思える瞬間だ。

それは、長年積み重ねてきた関係が、思いがけない形でつながりとして現れるときである。理屈ではなく、体感として「つながっていたんだ」「目に見えた」と実感する瞬間である。そのような場面に、これまで幾度となく立ち会ってきた。逆に言えば、そうした瞬間がなければ、長くこの業界に居られなかったかもしれない。そうした場面を紹介したい。

組織の記憶が人を育てる－カルデラ港

コスタリカ向け円借款第一号として供与された「カルデラ港建設計画」は、1974年に着工し、1981年に完成した。防波堤・岸壁・ヤード一体として整備する初の近代港の新設、グリーンフィールド型の事業となった。当時の中南米地域での借款で、これほど大掛かりに近代港を整備した事例はなく、日本型港

湾 ODA が本格的に現れた草創期の事例となった。

また、日本の政府開発援助が「近隣重視の戦後賠償／処理」から「世界規模の経済外交・国際戦略」へ転換したのが 1970 年代だった。それまでの技術協力・移住関連組織を統合して、1974 年に JICA が設立された。借款部門との統合、一元的な国際協力の実施機関となる新生 JICA は 2008 年まで待たねばならない。

このプロジェクトでは、借款での単なる施設整備にとどまらず、港湾建設、維持、管理手法等々の日本的な技術移転のために多くの専門家が派遣された。その中の一人に安武啓揮氏（港湾建設 1977～1980 年）がおられた。安武専門家は施工管理、品質管理の技術指導に従事された。

話はそれるが、当支所では、2024 年、コスタリカ協力 50 周年を機に、これまで協力に関わった方々の証言・メッセージを集め HP で公開している。周年行事の式典／パンフレットを作成し、メッセージを出して終わりではもったいなく、コスタリカ協力を汗した、専門家、協力隊員、研修員等々から生の声、写真を収集し、記憶と記録に留め、長く顕彰していく取り組みだ。しかし、半世紀前の方々を探し出すことは至難の業だ。2000 年代以前は年が古くなるにつれて探し当てられる方々はどうしても少ない。

2025 年、日本の港湾関係者の当地来訪の際に、「カルデラ港建設に従事した方と連絡がとれる」ということをお聞きした。その伝手を頼り、安武専門家にたどり着いた。寄稿いただいたメッセージには、公共事業運輸省（Ministerio de Obras Públicas y Transportes, MOPT）の副大臣、港湾河川局長から始まり、若手技術者、運転手さんの氏名まで記載があり、当時の緊張感と協働の密度が伝わってくるものであった。コスタリカ側関係者と日本側専門家との当国初の近代港建設の情熱にあふれたやり取りが伝わってくる。

2026 年、このメッセージを読まれた MOPT のルイス・ハビエル・ビジャロボス氏から当支所にメッセージが届いた。曰く「この時の若手技術者こそが、自身が入省した時の初めての上司だ。この上司が、自身を海事・港湾分野へと導いてくれた人物だった。海事工学に深く魅了され、その後大学院に進学することを決意した」。ルイス氏からのメッセージには安武専門家のみならず、多くの日本側専門家からの薫陶を受けたこと、それが今なお、当地の公共事業運

輸省、わけても港湾開発に携わる方々に脈々と伝わっていることへの謝辞があった。

日本の技術や情熱が専門家を通じて、当地の技術者に伝わり、その技術者が後輩技術者に伝えていく、「カルデラ港建設」というプロジェクトは遙か昔に終わったものの、考え方や情熱が人から人へ伝わり続けている、これこそが、本来の国際協力の核心であり、「信頼」というものの本質ではないだろうか。

付言すれば、日本語やスペイン語で書かれたメッセージを言語能力に長けた所員がそれぞれの言語に翻訳し、JICA 本部の協力を得て HP に掲載していたこと、安武専門家のメッセージのスペイン語版を所員が公共事業運輸省に紹介したこと、等々それぞれ絶妙なタイミングがあったればこそつながった事例でもあった。また、ルイス氏の父はコスタリカ電力公社（ICE）の水力発電に関わる技師で JICA との協力にも携わっていたため、ルイス氏は幼い頃から日本の協力について親しみがあったのだらうと思われる。



写真1 完成間近のカルデラ港（1980年12月）（安武啓揮元専門家撮影）



写真2 現在のカルデラ港（2024年）（JICA 提供）

立ち居振る舞いが、未来を動かすーコスタリカ大学

1974 年は当地で技術協力が開始された時期でもあった。最高学府であるコスタリカ大学で電子顕微鏡の供与と技術指導を含んだ医療協力が行われたの

だ。以来、コスタリカ大学とは日本語教師、水産、スポーツ等々の分野での協力隊員派遣や近年では日本の開発の歴史や考え方を伝える「JICA チェア」での講義を通じて親日派、知日派育成を図るなど様々な形態での国際協力を展開しているところだ。

これらを記念して、2024 年 10 月コスタリカ大学における JICA 協力 50 周年記念式典が開催された。これまでの実績の紹介や今後の展望について語られた場であった。その中でも白眉は、第一号案件であった「電子顕微鏡プロジェクト」で派遣された小塚啓道専門家からの祝辞メッセージをビデオ放映できたことであった。

1974 年当時、小塚専門家がコスタリカ大学の教授陣に電子顕微鏡の取り扱い方などの技術移転を行っている時、同大学のグスターボ・ゲテレス氏は学生として学んでいた。電子顕微鏡を専門とはしていなかったものの、同じ建物で学んでいたグスターボ氏は、高度な知見を持つ小塚先生が、キャンパスですれ違うたびに気軽に声をかけてくれたことに感動していた。時には、研究者としての立場から励ましを受けることもあった。人としての立ち居振る舞いを学んだ。

後年、当時の学生が半世紀を経て学長となり、この式典計画を温めた際、真っ先に念頭に置いたのは、当時の小塚専門家の式典への招へいだった。JICA も必死になって全国くまなく連絡先を探し歩いた。御年 90 歳を迎える小塚氏の招へいは叶わずとも、式典当日のビデオメッセージが実現したのだ。技術移転の対象ですらない一人の学生に与えた印象が、50 年後に具体的な行動として現れる、人が人に与える影響の長さや深さを実感させられる出来事であった。



写真3 小塚啓道専門家からのビデオメッセージ@コスタリカ大学協力 50 周年式典（筆者提供）

おわりに 一信頼で世界をつなぐ

予算には限界がある。制度にも限界がある。すべての案件が実現するわけではない。

それでも、人と人との関係は残る。そして、その関係こそが、長い時間の中で最も確実に次の世代へと受け継がれていくものである。

国際協力の本質は、必ずしも目に見える成果の中にだけあるのではない。人と人との間に生まれる信頼、その積み重ねこそが、最終的に社会を形作っていく。

どれほど小さな関わりであっても、その一つひとつがやがて誰かの選択に影響を与え、次の行動を生む。

だからこそ、目の前の一人ひとりとの関係を大切にしたい。

それが、在外拠点にできる最も確かな仕事であり、そして「信頼で世界をつなぐ」ということの、真意だと考えている。

参考資料

JICA コスタリカ 信頼で世界をつなぐ～メッセージ集～

（日本語）<https://www.jica.go.jp/overseas/costarica/activities/50syu/index.html>

（スペイン語）<https://www.jica.go.jp/spanish/overseas/costarica/activities/50syu/index.html>

安武啓揮専門家メッセージ

（日本語）https://www.jica.go.jp/overseas/costarica/activities/50syu/1578592_55881.html

（スペイン語）https://www.jica.go.jp/spanish/overseas/costarica/activities/50syu/1578592_55883.html

ルイス・ハビエル・ビジャロボス氏メッセージ https://www.jica.go.jp/overseas/costarica/activities/50syu/1582651_55881.html

小塚芳道専門家メッセージ

（日本語）https://www.jica.go.jp/overseas/costarica/activities/50syu/1544832_55881.html

（スペイン語）https://www.jica.go.jp/spanish/overseas/costarica/activities/50syu/1545327_55883.html

コスタリカ大学における JICA 事業 50 周年記念 https://www.jica.go.jp/overseas/costarica/information/topics/2024/1559412_52804.html

（よしだ さとし 国際協力機構 [JICA] コスタリカ 所長）

ろう者と国家、 教育の交差

アジア・アフリカ・南米における
言語資本としての手話
森 杜也 ※



『ろう者と国家、教育の交差

ーアジア・アフリカ・南米における言語資本としての手話』

森 杜也編著 ひつじ書房

2026 年 3 月 353 頁 6,200 円＋税 ISBN978-4-8234-1338-4

世界どの国にもろう者がいて、音声言語とは異なる手話が使われているが、その実態研究は少ない。本書は中国、インド、アフリカのタンザニアとカメルーン、フィリピン、ブラジルの手話の歴史と現状、国家の言語政策との関わりを内外 7 人の研究者が各国の手話とろう者の社会の状況について似通ったところ、異なるところを描き出したもので、編者は日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所主任研究員。

ブラジルの手話についてサンタカタリーナ連邦大学の二人の専門家が執筆し、アジア経済研究所の近田亮平主任研究員が「ブラジルにおける社会発展と国家と手話 一法制度と行為者からみた課題」を論じている。社会的障壁によって障害者を最後の貧困者にならないためにも、社会開発と手話という言語問題に注目した論集。

〔桜井 敏浩〕

ラテンアメリカ参考図書案内